

左義長まつり

近江八幡に春を告げる、毎年行われる「左義長まつり」は、400 年以上の歴史を持つ、華やかでドラマチックな祭典だ。華やかに飾られた左義長の巡行、その左義長を押し合う力比べ、そしてクライマックスには左義長を燃やして神に捧げる燃え盛る炎が特徴だ。国選択無形民俗文化財であり、3 月 15 日に近い週末の 2 日間にわたって開催される。

苦難の歴史

近江八幡の左義長まつりの歴史は 16 世紀にまでさかのぼる。1579 年、天下統一を目前にした戦国武将、織田信長（1534-1582）の発案で始まったとされる。この年、信長は新たな拠点となる安土城の完成を祝い、安土の城下町で祭りを催した。武将自らが派手な衣装を身にまとい、民衆の中で踊ったと言われている。しかし、信長は安定した政権を築く前に、1582 年に殺害されてしまう。安土城は廃城のなり、安土の人々は近くの八幡町（現在の近江八幡）に移り住んだ。地元神社の祭礼に参加することを求めたが、拒否された。そこで、古里の「左義長まつり」を復活させたのである。

左義長祭りとは、1 月に日本全国で行われる祭りで、正月飾りを焚き火で燃やし、年末年始に福を運んでくる神々と別れを告げるのが一般的である。信長を始め、近江八幡の人々が続けてきた「左義長まつり」も、もともとは旧暦の 1 月（太陽暦の初春）に行われていたが、19 世紀末に太陽暦が採用されてからは 3 月に開催されるようになった。

見世物の食べ物

左義長祭りは、祭りの名前の由来となった左義長という山車を中心に行われる。左義長の本体は、木と稲藁を約 3m に積み上げたピラミッド型の松明である。その上部には、火除けの意味を持つ赤い紙垂や、扇子、紙玉、財布、サイコロなどの縁起の良い飾りが施される。左義長の主な装飾品は「だし」と呼ばれ、松明の前部に取り付けられる。だしにはその年の干支の模型が目立つように描かれている。左義長を担ぐために支柱を通し、高さ約 8 メートルの建造物全体を縄で縛る。

だしの特徴は、食べられるものだけで作られていることだ。従来は穀物や豆類、魚のフレークや昆布などの乾燥海産物で作られていたが、近年はコーンフレークやパスタ、ガムなども使用されている。だしに食材を使うのは、前年の収穫に感謝し、今年も豊作であるようにという願いが込められている。近江八幡文化伝承館と旧伴家住宅では、一年中だしの複製を展示している。

謡い、喧嘩、ピンクのモヒカン

土曜日の午後 1 時、日牟禮八幡宮に町内 13 地区の左義長が集結することから祭りは始まる。コンクールで審査された後、順次、旧市街を練り歩く。左義長は重さ約 500 キロ、約 30 人の踊り子が担ぐ。踊り子たちは「チョウヤレ！チョウヤレ！」「マッセ！マッセ！」と掛け声をかけながら、互いに励まし合う。「チョーヤレ」は「左義長さしあげ」の略で、「マッセ」は「左義長めしませ」と言う意味である。踊り子の中には、派手な服装をし、派手な化粧をし、髪を明るい色に染める人もいる。これは織田信長の豪遊ぶりを受け継いでいるのだという。午後 5 時頃に巡行が終わると、左義長は神社に戻され、コンクールの優勝者が発表される。

2 日目は、朝から左義長が巡行し、神社では「けんか」と呼ばれる力比べが行われる。これは、2 台の左義長を敵対する集団が押し合いへし合い、片方の左義長が倒れるまで戦うものである。けんかは、町内が神様に自分たちの強さと誇りを示すためのものとされているが、その起源は、かつて狭い町道で左義長を担ぐ集団がすれ違う際に、必然的に発生した対立にあると考えられている。祭りのクライマックスとなる午後 8 時、再び神社に左義長が集まり、担ぎ棒を外し、左義長を燃やして神様に捧げる。この行為には防火祈願の意味もある。午後 11 時頃、燃え尽きるまで火の周りで踊り続け、巫女による神楽で祭りは正式に終了する。

全員参加だ

現在の左義長まつりは、左義長が町内の人々によって作られ担がれることから、町内の誇りを表すとともに、近江八幡の商家の財産が左義長の豪華さと壮大さを可能にした歴史的背景を持つ。毎年、正月になると左義長の準備が始まるが、その費用は住民の協力と役割分担でまかなわれている。左義長制作の喜びと誇りを共に分かち合う、そして無病息災や五穀豊穡を祈願して、みんなで左義長を燃やす。その準備の過程で住民の心が育まれ、クライマックスの燃え盛る炎は、先人たちへの哀悼の意も表している。